

高山植物の覚え書 I

清水 建 美

T. Shimizu: Occasional notes on alpine plants I

信州という土地がらのせいもあって、このところ高山植物を調べる機会が多くなった。ここでは、その過程で気のついたことを断片的ではあるが、備忘録として書きとめておくことにする。

1. ミヤマイワニガナ *Ixeris stolonifera* A.

Gray var. *capillaris* (Nakai) T. Shimizu

ミヤマイワニガナは、最初に中井 (1928) が上高地から *I. capillaris* Nakai として報告した。北村 (1935) は、これをイワニガナの亜種と考えて、subsp. *capillaris* (Nakai) Kitamura とし、キクバデシバリ *Lactuca stolonifera* var. *sinuata* Makino をここに合一したが、後の論文 (1956) では両者をまとめてイワニガナの品種 *f. sinuata* (Makino) Ohwi とする大井 (1953) の意見を採用した。一方、武田 (1937) はミヤマイワニガナに言及することなくキクバデシバリをイワニガナの変種 *I. stolonifera* var. *sinuata* Takeda とみなし“亜高山帯以上高山帯の裸地”に生ずると記した。原 (1952) は、キクバデシバリとミヤマイワニガナを区別はしたが、前者に武田の文献を引用しているので、キクバデシバリを高山植物とみなしたことになる。

キクバデシバリ *L. stolonifera* var. *sinuata* Makino を最初に発表した牧野 (1926) によると、その産地は、“Japan, rather rare”と記してあるのみである。そこで、若林三千男氏を煩わせて牧野標本館所蔵のキクバデシバリの原標本を探してもらったところ、牧野博士が検定されたとみられる標本“静岡市清水山、鶴田章逸 6、明治44年4月5日”が一枚出てきた。この標本には、“キクバイハニガナ (新称)”と博士の手記がある。これは、頭花はまだ開いていないが、匍枝はせいぜい長さ10cm程度、匍枝の葉は葉身の長さ1.5cm葉柄は1.5cmに及び、根葉にも匍枝の葉にも大きな切れ込みがある。清水山は静岡市郊外の200mそこそこの低い山である。これを、キクバデシバリの Lectotype (選定基準標本) とする。

ミヤマイワニガナは、キクバデシバリと異って高山または亜高山生であり、繊細な匍枝がよくのびて50cm以上になることはふつうであり、その節間は長

く、葉は小さい。葉身は、根葉とともに全辺かキクバデシバリ同様に大きく切れ込む。こんな相異点を考慮して、私はキクバデシバリとミヤマイワニガナを区分し、ミヤマイワニガナをイワニガナの変種とする見解をとる。新変種名は、別に正式に発表する。キクバデシバリは *I. stolonifera f. sinuata* (Makino) Ohwi, p. p. でよい。

文献の詳細については、原 (1952) の“日本種子植物集覧 II”を参照されたい。標本の調査をして下さった若林氏に深謝する。

2. タカネヤハズハハコ *Anaphalis alpicola* Makino

ヤマハハコ属 *Anaphalis* は北半球の温帯から寒帯にかけて数十種があるが、周北極地域に広く分布しヨーロッパにも北アメリカにもあるのは、ヤマハハコ *A. margaritacea* (L.) Benth. et Hook. *f.* だけである。大部分の種は東アジア産でとくに中国に多く“中国植物志 75 卷” (1979) には45種が記録されている。タカネヤハズハハコは日本固有の高山植物とみなされているが、近縁種は中国に求められる。なかでも、甘肅南部・青海東部・四川西北部に生ずるという *A. lactea* Maxim. が近い。このほど、ニューヨーク植物園所蔵の Southwestern Kansu: T'ao River basin, 8200 ft., J. F. Rock 12899”を1枚見たが、“タカネヤハズハハコと比べると、総苞片の中が少し広いくらいのちがいがしか認めることができなかった。恐らく同種だろうと思うが、中国の資料の入手を待って検討の必要がある。

3. オオヒラウスユキソウ *Leontopodium miyabe-anum* Tatewaki ex Watanabe, pro syn.

オオヒラウスユキソウは、北海道後志の大平山の石灰岩地に生え、渡辺 (1956) によってハヤチネウスユキソウ *L. hayachinense* (Takeda) Hara et Kitamura の変種として発表された。改めて、“芦別市キリギシ岳、渡辺 s. n. Aug. 22, 1969 (TNS); “後志：島牧郡大平山、1000~1900m, 清水 16620 Aug. 8, 1965 および 16641, Aug. 8, 1965 (ともに, SHIN)”を検定したところ、キリギシ山の標本は雄株、大平山の標本は 16620 が雄株、16641 が雌株と雌株の混合であることが判った。つまり、オオヒラ

ウスユキソウは雌雄異株である。このほか、有花茎の葉が25〜35個もあり、先端近くまで巾が変らないなど、ハヤチネウスユキソウとはかなり異っているので、独立種と考える。

ハヤチネウスユキソウは、常に頭花の周辺部には糸状の雌花、中心部には筒状の雄花があり、茎葉は7〜10個程度、先細り気味にとがっている。

4. ヨノミ類 *Lonicera caerulea* L.

*L. caerulea*は、1対の花の基部にある4個の小苞が全く合生してつばをつくり、2つの子房を包み込み、成熟すると黒紫色の液質の偽果をつくる点、スイカズラ類の中では全く特異である。この特徴の故に Rehder (1903)はこの種に対し一つの亜節、Subsect. *Caeruleae* を提案した。

ところで、本種の分布域は周北極地方の亜寒帯および寒帯全域にわたり、外部形態上の変異がいちじるしく、種や種以下のランクで多くの群が識別されている。*L. caerulea*の基準標本の産地は、スイスである。Browicz (1976)に従うと、基準型は枝は無毛か粗毛を散生し、葉面に毛が少いものである。花冠は有毛である。これに対し、彼は、枝に長短両様の毛があり、葉の両面に多少とも粗毛のあるものを *subsp. pallasii* (Ledeb.) Browicz とし、ヨーロッパに1種2変種を認めた。これら2変種のほか枝に短毛のみがあるいわば第Ⅲ型も現存する——たとえば、“Jugoslavijska Slovenija: Vogel to Mt. Sija, 1500 1700 m, alpine meadow, T. Shimizu 32528 (SHIN)”や“Italia. Trentino: Mt. Cimon de Pala, Pala di Martino, ca. 1900 m, rocky shrubbery, T. Shimizu 32673 (SHIN)” —が、この型には何故か言及していない。

ヨノミ類の毛に長短2型のあることは、北アメリカでも注目されているが、日本の植物学書にはこのことは書かれていない。そこで、この形質を用いて日本のヨノミ類を調べてみると、ケヨノミ *subsp. edulis* (Turcz.) Hulténの枝には、散生する長さ0.8〜2 mmの長毛と0.2〜0.4 mmの長さの密生す

る微毛が認められるのに対し、マルバヨノミ *var. venulosa* (Maxim.) Rehd. には微毛しかない。したがって、ケヨノミはヨーロッパの *subsp. pallasii* に対応し、マルバヨノミは第Ⅲ型に対応する。 *subsp. caerulea* に相当するものは今のところ見当たらない。ケヨノミには、葉面に多少とも粗毛があるが、マルバヨノミの成葉には極端に毛が少いことも両者の特徴といえる。ヨーロッパ産の *L. caerulea* の実は苦くて食べられないがアジア産の実は甘く食べられるという事実に基いて、両者を亜種とする Hultén (1930) の考えを採用し、それぞれの変種は枝の毛の性質による対応変種と考えておく。

北アメリカには、ヨノミ類は太平洋側の *L. cauriana* Fern. とカナダおよび合衆国東北部の *L. villosa* (Michx.) R. & S. があるが、アラスカにはない。ともに、実は食べられるという。Hitchcock ら (1959) によると、西部のヨノミ類は、枝に両型の毛のある *L. caerulea* であり、実の赤色のものに *L. cauriana* を当て亜種以下のランクとして扱うべきだという。東部の *L. villosa* は、枝葉の毛の有無や多少によって一般に5変種が区別されているが、結局は *L. caerulea* の種内変異である。先述のように、2種類の毛のあり方に着目して、それぞれの対応関係を示したものが表1である。日本のヨノミ類は、たとえば原 (1952) によると、ケヨノミ、クロミノウグイスカグラ、ナガヒケヨノミ、ホソバヨノミ、ヒロハヨノミ、マルバヨノミ、ヒダカヨノミの7品があるが、ここではケヨノミとマルバヨノミの2変種を認め、前5者をケヨノミ、後2者をマルバヨノミに合一する。ヨーロッパ、アジア、北アメリカから報告されているヨノミ各群は、同一視点に基いて整理する必要がある。

文 献

- Browicz, K. (1976) *Flora Europaeae* 4: 46.
Hitchcock ら (1959) *Vascular plants of the Pacific Northwest* 4: 456-458.
原 (1952) *日本種子植物集覧* 2: 38〜40.

表1 ヨノミ類 *L. caerulea* の形質の対比と分類群

地 域	ヨーロッパ	日 本	合衆国西部	カナダおよび合衆国東北部
食用の可否	不 可	可	可	可
枝の毛	subsp. <i>caerulea</i>	な し	な し	<i>var. tonsa</i> <i>var. fulleri</i>
無毛または散毛				
長短両型の毛	subsp. <i>pallasii</i>	subsp. <i>edulis</i> クロミノウグイスカグラ ケヨノミ など	<i>var. cauriana</i>	<i>var. villosa</i> <i>var. solonis</i>
短毛のみ	第Ⅲ型	<i>var. venulosa</i> マルバヨノミ ヒダカヨノミ	な し	<i>var. calvescens</i>